

## 【明かされなかった信実】



燃える陽射しが陽炎を昇らせる日中の砂原は、星の静けさを仰ぎ見て夜の帳を下ろしていた。

何処吹く風は、無表情に佇む彼の胸元を素知らぬ顔で通り過ぎていく。音も無く、緩やかな呼吸の間隔は、すべてが終わった後の物悲しさをたたえていた。

ここは南ザナラーンの北西部に位置する【キャンプ・ブロークンウォーター】であった。彼の背に映る集落の明かりは消え、その岩肌は温もりを潜めている。左手にはアマルジャ族が占有する【灰の陣営】を望み、虫も静まり返った夜更けにもかかわらず松明は轟々と焚かれているのだった。

そこに一際小柄な、アマルジャ族とは似ても似つかない仮面を被ったシルエットが不動明王の如く佇んでいる。果たしてそれはミコッテ族のルーン・ガーだった。その小さな身体に大きな覚悟を秘める彼女の凛々しい佇まいは、今の彼にはどう映ったであろう……。

その姿を半眼で見据えた後、踵を返した彼はどこか憑き物が落ちたような表情に見えた。

振り返れば、アラミゴ出身者のキャンプ【リトルアラミゴ】は、彼の忘れ難き故郷の原風景を象っていた。

彼は思う。すべては、終わったのだ……。

かつての闘いで、正々堂々と剣を交え、全力で闘い敗北した。その代償は、功を急いで幻想の英雄に目が眩み犯した組織への裏切りと、幼き頃より共に腕を磨いた親友へ向けた殺意によって、自身の存在は歴史から排除されたのだ。

握力が戻らない左手に目を落とし、何かを掴もうと掲げた左腕の先に、栄光と没落を分かち地平線が見えた。それはよく見れば【レッドラビリンズ】の頂であったけれど、まるで横薙ぎに払われた剣閃の如く白光が瞬いて、彼を陰謀渦巻く闘いの記憶へと誘うのだった。

「……ロロリトめ、ヤツの邪魔さえ入らなければ俺に勝機は傾いていたはずだった」

あの日、怒り狂うラウバーンの敵視を彼が一挙に担わなければ死屍累々、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していたに違いない。ナナモ女王が暗殺されたという嘘の情報を流し、ラウバーンの混乱を誘い、テレジ・アデレジを混乱に乗じて排除するというロロリトの思惑は成された。



しかし、我を失ったラウバーンはあらぬ濡れ衣を着せたクリスタルブレイブもろとも切り伏せようとしていた。事態の激化に伴い、三国の領主も退いたことでいよいよラウバーンを縛るものは無くなり、その矛先はロロリトへ向いたのだ。

その隙を突いて彼は、ラウバーンの腕を切り落とす。

さらに彼の狂言は、この上なくラウバーンを刺激した。

そして舞台を、死闘へと劇化させたのだった……。

「” そういう言い訳をする奴ほど、自分の不甲斐なさを誰かのせいにするものだ”。貴方がそう言ったはずよ……イルベルド」

乾いた風に少しの冷ややかさを感じる目元に、曇りの無い涼やかな色合いの眼鏡を携えて、その奥に光る知的な眼差しはかつてラウバーンの右腕と呼ばれたエレゼン族の知将の姿だった。

「お前は……ロアユ。どうしてここに……」

イルベルドが目を覚ましたとき、ここリトルラミゴのテントの中に居た。彼はあの闘いの最後、後頭部にしたたかな衝撃を受け昏倒したのだ。決着はついていたとはいえ、本人も誰にやられたのかを知らないでいる。

しかし、彼女を見た瞬間に、そういうことだったのかと理解した。

「貴方と同じ。私が託された使命は、貴方を殺させずにあの場所から遠ざけ、失踪させること」

「……そうか、なるほどな。ロロリト……奴は俺が契りを反故にしてラウバーンを殺すだろうことを予見していたに違いない。だからお前を、あの騒乱に乗じて解放し、俺たちの闘いに終止符を打った。……見返りはなんだ？」

ロアユは鋭い眼差しを伏せ、薄く開かれた視線は憂いに満ちた表情で、発せられた言葉に邪気は無かった。

「私の亡命……。本来であれば、極刑が決まった私はすでにこの世にはいない。エリヌ・ロアユが処されたことは公表されるが、生きて落ち延びろと言ってきた。その為の足の手配と、しばらく暮らせるだけの資金もくれてやるとな。その条件として、これから起こる貴方と局長の闘いを止め、二人を殺させるなど……。お膳立ては全て用意されていたのだ。私に残された選択肢など……無かった」



イルベルドとラウバーンの闘いは、他のものを寄せ付けぬ力の押し合いであった。

真に力の勝負となったとき、片腕を失ったラウバーンには不利な状況かと思われたが、その力強さたるはウルダハの守護神ナル・ザルの加護を受けた化身と見紛うほどだった。失った左腕には死者の世界を司るザル神が宿ったかのように、隻腕であることを感じさせぬ剣戟を放ち、右腕は一回りも二回りも太く隆起し、漂う剣気はまさにナル神の黄金の加護であった。

「お前ほどの手練をここで失くすのは惜しいと考えたんだろうな。俺とラウバーンの一進一退の激しい攻防の中で、物怖じせずに飛び込んできた時はさすがに驚いたぜ」

「局長の強さは知っている。私とてその中に割って入ることは躊躇った。しかし、最後の最後、貴方の剣が局長の渾身の一撃を受け砕かれた時、局長に一瞬の隙が生じたの。……そこで局長の不意を突けなければ、貴方は死んでいたわ」

二人の戦いは、香煙の間に留まらなかった。内壁を蹴破り、王宮の屋根へと戦場は転換したのだ。ゆえにそれは、機を窺っていたロアユに好機をもたらすことになる。如何に豪傑といえど、荒ぶる地上戦を繰り広げている闘士たちに空中は死角なのだ。

剣戟が交差する時、いよいよイルベルドの愛刀「黒刀・鬼切」をラウバーンの愛刀「呪剣・ティソーナ」が穿つ。

しかし、ラウバーンに一瞬の隙が生じた。そのままもう一太刀薙払えば、一刀の名の下にイルベルドを切り伏せることが出来たはずだったにもかかわらず。

一瞬の隙は、躊躇い。我を失っていたようでその実、ラウバーンは親友を手に掛けることを躊躇ったのだ。虎視眈々と狙っていたロアユならば、その一瞬を見逃すはずもない。

片手正眼、ロアユは音も無く飛び上がり瞬く間に二人の間に「ドラゴンダイブ」を打ち落とす。三人を包む炎塵が密集した空気を焦がす刹那、流れるような槍術を繋ぎ、ラウバーンの刀を空へ弾いた。

火の粉の煌めきは、ロアユの三尖槍をスタールビーとルベライトに染めた……。

「……ああ。俺は、片手を落としたラウバーンにも勝てなかったんだ。そして、目の前に飛び出してきたマスクを被った槍使いに、俺もラウバーンも虚を付かれた」



彼の記憶はそこで暗転した。

マスクを被った神速の槍術を披露した誰かは、果たしてロアユだったのだ。剣を砕かれたイルベルドは、もはや翼をもがれた鳥である。

イルベルドとラウバーンは、ロアユの「足払い」からの峰打ちで即座に昏倒したのだった。

「私はあの時、被っていたマスク越しに局長と眼が合った。もう怒りの化身ではなかった。……安心したわ」

クリスタルブレイブの象徴である青服の端々は破れ、無造作に千切れた裾は黒く焦げている。しかし、傷のどこを見ても急所からは外れていることが見て取れた。それはラウバーンが手加減していたわけではない。片腕を落とされたのだ、相手に殺されるかもしれないのは自身なのだから。

それでも、闘士たちは剣を交えることで語り合うという。あの時、あの瞬間、他者には分からぬ二人だけの対話があったのだ。

眼を落としたイルベルドは薄く笑い、心なしかおどけた表情でロアユを見た。

「おっと、冷酷な二重スパイさんでも情が移るんだな。俺やラウバーンが殺されててもおかしくは無かったんだが」

ロアユは眼を伏せて、淡々と言葉を紡ぐ。

国をまたぎ罪を背負う咎人だが、その横顔は遠くイシュガルドの雪のような肌であり、夜の冷めた砂原のようにこざっぱりとした雰囲気を醸し出す淡白な美しさであった。

それは、短くない時間をラウバーンの側近として過ごしたロアユの信実なる心根が見せた表情であろう。

「貴方は……殺す気なんて、なかったのね。煽って、コケにして、局長を怒らせることで標的を自分にさせた。まるで、闘いそのものを望んでいたかのように」

「……どうだろうなあ？ 腑抜けたラウバーンを片腕にしてやったんだ。あのままもう片方の腕も落としてやっても良かったんだぜ？

……だが、あいつは俺が焚き付けたにもかかわらず冒険者を解放し、あの事件の真相を託した。だから……」

死闘は、私闘へと変わった――。

「遅かれ早かれ、あいつとは一戦交えなきゃならなかっただろう。俺はあいつに……ラウバーンに、憧れてたんだろうな。あいつのように部下を引き連れて、一旗上げることが目標だったんだ。だから、アラミゴ遠征というロロリトの提案にまんまと乗っかっちゃった。……情けねえ」

イルベルドは頭を掻いて空を仰ぎ見た。流れるものは星だったのかそれとも……。

「あいつの背中を追ってアラミゴを出て、あいつの栄光を耳にして胸を躍らせた。あいつが、俺の前を希望で照らしてくれたから、薄暗くドロ臭い水を啜ってでも、やってこれたんだ……。いつか追いついて負かしてやりたい。そして肩を並べて、来るべき闘いを、戦場を駆け回りたかった。それが、クリスタルブレイブの隊長ってポストに自惚れていたのかもしれねえな……」

「イルベルド……」

ロアユはイルベルドの背中を見つめた。

あの騒動で、彼を恨む輩は大勢出たことだろう。やがて時代の移り変わりと共に、事件には尾ひれが付き、イルベルドはダークサイドとしての烙印を押され以後の歴史から名を排除されるだろう。人々の記憶には、墮ちたイルベルドは闇に失脚したと刻まれるかもしれない。

しかし、イルベルドは最後まで、闘士だったのだ。

ロアユは空に滲ませる彼の背中に、明かされなかった信実を見たのだった。

「暁が瓦解した今、クリスタルブレイブが崩壊するのも時間の問題だろう。俺は今や落ち武者だ。組織を裏切り、親友を殺そうとして……泥を啜って切り開いて来た武器も、あいつを超えたかった闘士としての志ももう無い。安心しろ、俺はもうクリスタルブレイブでもなければ、ウルダハに戻るつもりもない」

イルベルドの言葉を聞いて、ロアユは太股の鞘から小さな刀を取り出した。

しかしそれは、懐剣ではなかった。刀身の折れた黒い刀を、イルベルドの足元に放って見せる。

「私は、北へ行く」

「北……イシュガルドか」

彼女がイシュガルドの下層民出身だったことは、イルベルドも知っている。

しかしなぜ、今なのか。それは彼の知るところではない。

「ロロリトから聞いた話では、今イシュガルドの情勢は大きく動いているらしい。……残してきた、妹がいるの」

イルベルドは目を見張った。おそらくラウバーンも彼女の妹のことは知らないだろう。

「私も、かつて突き放してしまったあの子のことを……アリシアを、愛そうと思う」

それは、懺悔の響きを含んでいた。

なぜ彼女が、帝国と内通し二重スパイに手を染めたのかを誰も知らない。ロアユが生きていたならば、帝国の魔手がいつやってくるかも分からない。

さりとて、どんな経緯があったにせよスパイであった以上、彼女の本当の名がエリヌ・ロアユであることも保障はどこにもないのだ。

しかし、「エリヌ・ロアユ」は死んだ。これからは、姉として生きる道もあるだろう。

「妹か……。生憎俺には、もう肉親は居ない。アラミゴ闘争の時に、みなが死んだ」

イルベルドは折れた愛刀を拾い、腰帯に携えた。

「俺は海を渡ろう。一からやり直してみようと思う。未だ帝国の支配下にあるアラミゴだが、俺にとっては唯一の故郷だ。あいつに在って、俺には無いものを探しに行こう」

歴史から排除された二人が向かう先には、どんな人生が待っているのだろう。ロアユとイルベルド、二人が背負った十字架は生涯消えることはない。

折れた剣と貫かれた心を携えて【第2の人生】を歩み始めた二人。

一度止まった歯車は、歴史という風に弄ばれて瓦解した。

しかしそれは、ロアユが、イルベルドが、エオルゼアから姿を消すということではない。やがてもう一度、彼らが表舞台に立ち上がることがあったなら、それはハイデリンが必要とした役割を担ったということだ。

今はもう遠いあの日、誰にでも在った幼き日々の郷愁。

ロアユにとって、どんな苦渋の決断があったか分からぬが、血を分けた者に背を向けることのなんと哀切な想いか。しかし残された者もそれと同じくらい苦悩したに違いない。

彼女の襖は大切な者を愛す以外に成せぬのだ。かつて心を、イシュガードの物悲しい雪のように凍らせて、スパイの任を遂行していたロアユ。その為に妹という存在と決別した過去は、きっと、彼女の人生において陰を落としたに違いない。

写本師としての彼女が死んだ今、その陰を照らすことが贖罪になることを信じて。

イルベルドの世界には、いつだってラウバーンが居た。

共に同じ師に鞭撻を乞い、日々闘士としてアラミゴの破壊神ラールガーのような勇猛で、猛々しい心で研鑽に明け暮れた幼少期。隣に居ることが当たり前になり、大切なことを見失うのは幼き日々の気づけない過ちである。

二人が成長し、アラミゴはガレマール帝国に侵略され準州化。その多くが難民となってしまった様を目の当たりにした彼は、英雄として黄金の栄達を成したラウバーンに憧れを抱いたのも無理からぬことだった。

かつては肩を並べていた親友であり、闘士であり、戦友であった。

その先へ突き進んでいったラウバーンの背中を追うことで、いつしか己を見失ってしまったのだ。

そろそろ彼は誰かを追うのではなく、自らの道を貫いて良いのではないか。

二人の旅路は、長いものになろう。

けれど、他でもない己が決めた道。振り返ることはあっても、決して歩みを止めることはあるまい。

「時に、イルベルド。貴方はかつて、私にこう言った」

ロアユは穏やかな風にコーラルピンクの横髪をなびかせて、イルベルドを流し見た。

「” どん底に落ちた人間は、それでも残された手札で精一杯足掻いて生きている”」

すると、常用している白銀の丸縁眼鏡を恭しく外し、それを砂原に放った。それはまるで、過去の自分との決別を意味していた。

「それは疑わない。けど……手札は入れ替えてこそ光り輝く。私はそうして生きてきた。私の手元には何も残っていないけれど、今は……一枚だけあればいい」

かつて捨ててしまったカード。ロアユはそれを求めて北へ行く。

イルベルドは、愚直なまでに妹を愛そうとする彼女の想いに胸を打たれた。

しかし彼は、天邪鬼なのだ。

「ふん。餞別として受け取っておく。それと……お前の背中にある長いヤツ。それだけは持っていけ」

「……ありがとう」

イルベルドはロアユの腕を認めていた。

大切な者を守る為には時に力がいることを、闘士はみな知っている。ゆえに、捨ててはならないもう一つのカードをロアユに持たせたのだ。

かくして二人は、それ以上の言葉を重ねずに背を向けたのだった。

ロアユはイシュガルドへ、イルベルドはアラミゴへ。双方が再び出会うことは、おそらく無いだろう。

それぞれの想いが、それぞれの道を作っていく。

二人のその後が風に伝い冒険者の耳に届くのは、おそらく遠い未来になるだろう――。

\_\_\_\_\_Ending of Ilberd and Eline-Roaille.





# あとがき



ファイナルファンタジー14、新生2周年！ おめでとうございます！

こんにちわ、Yuura.Erisell ことユーラです。

まず最初に、今年もFF14のお話を書かせて頂きました。

新生祭2周年記念小話、短編小説「明かされなかった信実」を最後まで読んで下さってありがとうございます。何か一つでも、思うところがあったならとても嬉しく思います。

読後感に浸るひと時ではありますが、よろしかったらもう少しお付き合い下さいませ。

さて、今回のお話を書くに至った経緯をお話させていただきます。

1周年と同様、2周年という節目も何か小話を書きたいと思っていました。前回も、メインストーリーの補完という意識はありましたが、色々な部分で伝えなかったメッセージを織り交ぜて書かせて頂いたのを覚えています。

それを踏まえた上で、今年はどういった方向性にしようかなあと考えていた所、公式で「蒼天秘話」ということで、記念小説の公開が始まりましたね。

今回は特に、メインストーリーの補完という意味合いが大きかったと思います。若き日のアイメリク卿のお話から、最後はナナモ様の決意まで。2周年ということで、2回目という象徴的な言葉が印象的でした。

加えて、お腹の底にストンと落ちるような、まさに腑に落ちた全4話のストーリー構成だったと思います。とても楽しく、そして新しい発見もあったりしてワクワクしながら読ませて頂きました。

そこで、私の中でも何人か「その後」が気になる人たちがいたのですが「蒼天秘話」で主要人物を当てている感じだったので、被ってしまうのもちょっと味気ないなと思って、最後の4話が配信されるまで、執筆はやめておこうと考えていました。

さりとして、いよいよ第4話で綺麗に落ちが付いてしまったので、私の立ち位置としては今回は「食後のデザート感覚」で楽しんで頂けたら嬉しいなと思います。

毎度のことながら、本編の設定とは異なる部分はすべてユーラの妄想ですので、そのあたりご了承ください。

そんなこんなで「蒼天秘話」の末席に添えさせて頂きました。





ピックアップしたのは、メインで大きな立ち回りをしてくれた二人ですね。  
3.0前であの展開に持っていったのは訳があると思っていましたが、おそらく「あえて」描写しなかった部分だと思うんですね。

だから、妄想力全開で構想をさせて頂きました。

いよいよラウバーンが人間の領域を10mくらいオーバーしてるんですが、私は彼に色々憑依させてるなあと思います（笑） 前回は伝説を作るためにティソーナの力を憑依させて固有LB発動させてみたり、今回は神様を……。ナルザルって確か商いの神様だったと思うので、戦闘タイプではないかもですが、ナルは生、ザルは死、というところから失った片腕に……。みたいにこじつけてラウバーンに強くなってもらいました。

それこそ、この憑依が可能なら両手をもがれてミロのヴィーナスみたいになっても、ラウバーンは何不自由なく戦闘出来ますよね（笑）

あとイルベルドとラウバーンの闘いで出した、イルベルドの愛刀なんですが、もしかしたら「あれ、鬼切って法典武器じゃん」って思った方もいると思うんですね。でも実は、頭に黒刀をつけて区別したのには訳があって、「羅生門」に出てくる茨木童子っていう鬼の片腕を切り落としたっていわれてる刀の名前なんですよ。（この刀は後に何度も改名される）ラウバーンの片腕を切り落とす、となったらもうこの武器しかないなと（笑）

それからロアユに関してですが、彼女はミステリアスな部分が多くて捕まったところまでしか公になってなかったと思います。

それなので、妄想しまくって極刑に処しました！

辻褄を合わせるために色々動いてもらいましたが、妹がいるという設定は無かったと思います。しかし、生きる目的を失くしてしまうと咎人としての印象しか残らないので、スパイとしてのロアユは死んで、今まで明かされてなかった妹を探しに行くという流れにしてみました。

私の勝手なイメージですけど、おそらくロアユって偽名なんじゃないかと思っています。

公式本編のリウヰアみたいに（彼女の場合は、本当に死んで双子という位置づけでルキアが出てきましたよね。中の人で分かりました（笑） こういう形にしておくと後々どこかで出てくるかなあという期待も込めて…。

（前廣さんに届け！この思い！）





最後に余談ですが、皆さん「グブラ幻想図書館」にはもう行かれましたでしょうか。何か、お気づきになったでしょうか。

私はそこでニヤリとさせて頂きました、本当にありがとうございます！（土下座  
「何が」とは申しません。ぜひ、隅々までID散策して頂いて、もしよろしければ私の去年の小話も読んで頂けたら、なお嬉しいなと思います！（笑

～1周年記念小話【新生祭目次録】～

<[言行録](#)> <[見聞録](#)> <[近思録](#)>

さあ、最後に何やら宣伝みたいのを差し込んでますが、改めまして今回の小話「明かされなかった信実」を最後まで読んで頂きましてありがとうございます。イルベルドとロアユに愛を込めて妄想させて頂きました。

二人の第2の人生を温かく見守ってくれたら嬉しいなと思います。

もう一度、2周年おめでとうございました！

来年もまた記念に拙作をお供え出来たらなと思っています。

ではでは！

Rumuh 鯖 Yuura, Erisell.

## 【Special Thanks】

古紙風背景素材：[水智様](#)

ボーダー素材：[胡蝶様](#)

Screen shot：[Final Fantasy XIV](#)

and..

You !

この作品はFF14の二次創作であり作者の妄想から生まれた物語です。  
スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合には即刻掲載を  
取り下げること、お約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2015 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

